

經濟論叢

第七十八卷 第二號

世界經濟と経済学……………松 井 潜 (1)

レーンの市場の理論……………堀 江 英 一 (13)

為替レート切下げの交易条件に与える効果……………西 川 徹 (33)

イギリス革命における農民闘争評価の問題……………武 暢 夫 (57)

[昭和三十一年八月]

京都大學經濟學會

レーニンの市場の理論

——『ロシアにおける資本主義の發展』の構造——

堀 江 英 一

一 はしがき

レーニンは、一九〇五—七年のロシア第一革命の終った直後、一九〇七年七月の『第二版の序文』のなかで、一八九九年執筆の『ロシアにおける資本主義の發展』の意義を要約して次のようにいっている——「この著作では、もろもろの統計報告を経済学的に研究し批判的に検討することをもとにして、ロシアの社会的経済構造としたがってまた階級構成との分析がなされているが、いまではこの分析は、革命の途上でのすべての階級の公然たる政治活動によって、立証されている」（『ロシアにおける資本主義の發展』——國民文庫版第一冊一六頁）と。「立証」される」のは、つぎの三点である。

一 「プロレタリアートの指導的役割はまったくはつきりした。歴史の運動におけるプロレタリアートの力が、人口全体のなかにしめるその割合とくらべてはかりしれないほど大きなものであることもまた、はつきりした。この二つの現象の経済的な基礎は、この著作のなかで証明されている」（前掲書一六頁）。

二 「さらに、革命は、いまや、農民の二重の立場と二重の役割とを、ますますはつきりさせている。一方では、貧農がこれまでになく貧窮化し零落したもとの賦役経済の大きな遺物と農奴制度のありとあらゆる残存物とは、革命的農民運動の奥深い源泉を、大衆としての農民の革命性の奥深い根源を、完全に説明している。他方では、革命の推移のなかにも、また多くの政治思想上の潮流のなかにも、この大衆の内的に矛盾した階級構成が、その小ブルジョア性が、その内部にある経営主的傾向とプロレタリア的傾向との敵対が、現れている。貧窮化した小経営主が革命的ブルジョアジーと革命的プロレタリアートとのあいだを動揺するのは避けられない。……農民のあいだでの二つの潮流の経済的基礎は、この本のなかで証明されている」(前掲書一六一七頁)。

三 「こういう経済的基礎のうえでは、ロシアにおける革命は、もちろん、不可避免的にブルジョア革命である。この命題を、つねにロシア革命のあらゆる経済的および政治的問題に適用することが必要である」(前掲書一七頁)。

ここでレーニンは一八九九年の『発展』と一九〇五年の『民主主義革命における社会民主党的二つの戦術』とを直結し、後者における「プロレタリアートは、実力で専制政治の反抗をおしつゝ、ブルジョアジーの動揺性を麻痺させるために、農民大衆を味方にひきつけて民主主義的変革を最後まで遂行しなければならぬ」(『民主主義革命における二つの戦術』——国民文庫版一二二頁)という民主主義革命における労働同盟論を、『発展』は経済学的分析から基礎づけたとみている。というのは、レーニンの民主主義的労働同盟論はまさしくいまいった三つの立証、とりわけはじめの二つの立証——プロレタリアートの徹底的革命性と小ブルジョアの農民層の二重性格との認識に立脚しているからである。

だが『発展』における民主主義的労働同盟論の経済学的基礎分析はきわめて一面的であった、あるいは「特殊な

仕方」で行われた、といつてよいであらう。レーニンはかれの實踐的課題にしたがつて民主主義的労働同盟論の經濟学的基础分析を二つの側面からまたは二つの段階で行つた——まず最初にプロレタリアートの農民層指導の客觀的必然性、第二にロシアにおける封建制撤廃のための民主主義革命の必然性。『發展』に集大成されるナロードニキ主義批判は第一の課題にささげられ、『農業綱領』はそれを前提して第二の課題の經濟学的分析を行つたのである。

いまさらいうまでもないことであるが、一八九三年の最初の論文『農民生活における新しい經濟的動向』から一八九九年の『發展』にいたるレーニンの科學的活動はいまいったようにナロードニキ主義批判に集中されており、その集大成が『發展』であつた。ナロードニキ主義というのはさきの『第二版の序文』からの引用にある農民層のイデオロギーであり、レーニンはそれをくりかえして強調した。レーニンは『人民の友とはなにか』のなかですてに、農民層の民主主義的革命的、したがつて民主主義労働同盟の可能性を評価しながらも、かれはどうして「民主主義者の思想（ナロードニキ主義—筆者）と完全に、また終局的に絶縁することが不可避であり、かつ緊急に必要である」(『レーニン全集』第一卷二八五頁。なお三〇三頁参加)といつたのであろうか。それは同盟者に弓をひくものでなからうか。

註 レーニンのナロードニキ批判はきわめて多面的であるが、大きくわけて次の三つになるようにおもわれる。具體的事実を中心とする批判(レーニンが最も重視したもの)——『農民生活における新しい經濟的動向』(一八九三年)、『ベルミ県における一八九四年—九五五年のクスターリ調査とクスターリ工業の一般的諸問題』(一八九七年)・その集大成『發展』、經濟学理論(市場理論)からの批判——『いわゆる市場問題について』(一八九三年)・『經濟学的ロマン主義の特徴づけによつて』(一八九七年)・その集大成『發展』、イデオロギー的批判を中心としたもの——『人民の友とはなにか』(一八九四年)・『ナロードニキ

主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判』(一八九四年)・『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』(一八九七年)・『どういふ遺産をわれわれは拒否するか?』(一八九七年)。

レーニンにとって、プロレタリアートは民主主義革命を徹底的にたたかひぬき、民主主義的労働同盟のなかにあつて動揺する農民層を指導せねばならないばかりでなく、民主主義革命をこえてそれを社会主義革命に転化する歴史的使命をもっている。だがしかし、プロレタリアートがこうした歴史的使命をはたすことができるためには、プロレタリアートは階級として独自の結集しなければならないし、したがつてまた思想的にもブルジョアジーや小ブルジョアから分離しなければならぬ。こうしてプロレタリアートの独自の結集こそ民主主義的労働同盟の勝利の、さらに社会主義革命勝利の第一条件であつた。レーニンの実践的なそして科学的な任務はこの第一条件をまづもつてととのえなければならなかつた。レーニンはそれを二つの段階を通じてやりとげた——まず最初に、一八九三年—一八九九年のナロードニキ主義批判を通じて小ブルジョアの社会主義をくつがえしてプロレタリアートの独自の結集の思想的地均しをおこなひ、ついで一九〇二年の『なにをなすべきか』と一九〇四年の『一歩前進・二歩退却』のなかでマルクス主義陣営内部の小ブルジョア思想(経済主義とメンシェヴィズム)をくつがえしてプロレタリア党組織の理論をつくりあげた。ボルシェヴィキ党は外と内との小ブルジョア思想の克服のうえに創設されたのである。こうしたプロレタリアートの独自の結集—プロレタリア党の結成のうえで、すでに『人民の友とはなにか』のなかでだされた民主主義的労働同盟論が一九〇五年の『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかでロシア第一革命の戦術としてうちだされた。民主主義労働同盟はこゝではじめて可能性としてばかりでなく、現実的なものとしてうちだされたのである。『発展』は、こうして民主主義的労働同盟の前提条件—プロレタリア党

結成のための思想的地均し役をもつていたのである。

こうして『発展』は、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』に展開された民主主義的労働同盟論と社会主義的労働同盟論との基礎条件たるプロレタリアートの革命性とプロレタリアートの独立した階級的結集を立証する経済学的基礎分析にささげられた。したがって、『発展』は、まず第一に客観的に、ロシアの内部で資本主義が発展してブルジョアジーとプロレタリアートの利害が衝突してプロレタリアートが歴史の力になっていくこと——資本主義の歴史法則がロシアにも貫徹していることが証明されなければならないし、第二にしたがって農民層も農村工業者層も内部的にブルジョア的階級分解をとげつつある動搖的存在であること——それが資本主義の歴史法則の例外でないことが証明されなければならない。レニンは、『発展』のなかで、このことを証明しようとしたのである。

二 ナロードニキ主義批判

いまいったように、レニンにとっては、民主主義革命と社会主義革命とをからぬくための保証はプロレタリアートの独自の階級的結集であり、この命題の客観的保証はロシアにおける資本主義の発展でなければならなかった。それでは資本主義の発展の研究がどのようにしてナロードニキ主義の批判になるのであろうか。しれわたったことであるが、順序として簡単に説明しよう。

ストルーヴェがナロードニキ主義の「本質」とその「根本思想」を「ロシアの独自の経済的発展の理論」のなかに見いだしたのに対し、レニンはそうしたストルーヴェの理解は「なぞ右の理想（ナロードニキ主義―筆者）が、

独自の發展という信念や、個人の役割にかんする特殊な學說と結合しているのか、なぜこれらの理想がわが社会思想のもつとも有力な潮流となつたのかということ」を全く不明のままにのこしていることを指摘し、「ナロードニキ主義の本質は、小生産者、小ブルジョアの立場から、生産者の利益を代表しているということである。…ナロードニキ主義の源泉は、農民改革後の資本主義ロシアでは小生産者階級が優勢であるという事実である」といつている(『ナロードニキ主義の経済学的内容とストルツェ氏の著書におけるその批判』——レーニン全集第一卷四二五—六頁)。

『人民の友とはなにか』以後のすべての著作のなかで、レーニンはナロードニキ主義をこの基礎からとらえ、さしに『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』のなかで古典学派経済学に対する最初の小ブルジョアの批判者シモンディとナロードニキとを関連させ、ナロードニキ主義をロシア特有の思想というナロードニキ自身の主張やストルツェの理解から解放して、それを世界的な思想系譜のなかに位置づけた——というよりも、レーニンは資本主義の發展過程でどこの小生産者層もがとる思想傾向として位置づけたのである。レーニンはここからナロードニキ主義批判を出発させ、それをここに帰着させている。

この小生産者階級——その中心である農民層の自然的な思想傾向を、レーニンはつぎのように要約している——

「その内容は、ロシアの小生産者、小ブルジョアの利益と見地を代表することである。だから理論におけるナロードニキは一方の顔では過去を見、他方の顔では未来を見るヤヌスそっくりであつて、それはちよつと、実生活においては小生産者——一方の顔では過去を見て、自分の小経営を強化しようとする欲し、一般の経済体制や、その体制を支配する階級を考慮にいれる必要については知らず、また、なにも知らうと欲せず、他方の顔では未来を見て、自分を零落させつつある資本主義にたいして敵対的な気分をいだいている小生産者——が、ヤヌスであるのと同じことである」(前掲書三五七頁)。

レーニンはこのことをうましくかえしている。小生産者は、一方ではかれらを圧迫する封建制度―「農奴制（旧貴族層）」に反対するが、他方では封建制度を分解する資本主義が小生産者層をも分解するので、自分の小経営を強化しようとして資本主義―「ブルジョア性（新町人層）」にも反対する。だから、ナロードニキは不可避性をもつて発展するロシアの資本主義を過去に、小生産者の樂しかりし過去にひきもどそうとし、そして事實問題としてはその夢想する過去が「農奴制（旧貴族層）」社会であることをわすれる。資本主義社会の矛盾の解決を、シスモندیやナロードニキは過去の小経営への復帰のなかに「夢想」したのに対し、マルクス主義者は資本主義の発展という遺産をわれわれは拒否するか』のなかに、ロシアの遺産として、こうした小生産者思想を拒否して資本主義の進歩性を強調したブルジョア啓蒙思想をえらんだのである。

小経営への復帰という反動的方向で資本主義の矛盾を解決しようとする「夢想」した小生産者のナロードニキ主義は、経済学的には、まず第一にかれのいう資本主義たる機械制大工業（これはだれの目にも資本主義である）を共同体的「人民的生産」―生産手段を所有する小経営と対立させ、そのことによつて一方では共同体的「人民的生産」を資本主義一般と対立させるとともに、他方ではロシアにおける資本主義を過少評価して、ロシアには他道の―小生産への復帰が可能であることを信じさせようとしたが、さらに第二に共同体的「人民的生産」の資本主義的分解をかれらの全体的窮乏（つまり購買力の減退）と考え、そのことによつて資本主義は国内市場の衰退によつて外国市場をもたないロシアでは発展しえないと証明しようとした。小生産者階級の経済学―シスモندیとナロードニキの経済学の基本特徴はこの二点につきるといつてよからう。

レーニンのナロードニキに対する経済学的批判——その集大成としての『發展』は、理論的・実証的にこの二点をくつがえすことであつた——まず第一に、「人民的生産」は資本主義的分解途上の資本主義のよりひくい發展段階の生産形態であつて、機械制大工業、したがつて資本主義に對立するものでないこと、第二にこうした資本主義の發展そのものがみずからの国内市場をつくりだしてゆくこと、を証明した。『發展』という書名がこれをあらわしている——それは『ロシアにおける資本主義の發展——大工業のための国内市場の形成過程』となつてゐる。

こうしてレーニンは、「人民的生産」——小經營の解体を証明して農民層の二重の立場と二重の役割を立証した——「人民的生産」——小經營のイデオログたるナロードニキ主義を經濟学的にくつがえした。レーニンはロシアにおける資本主義の發展を経済学的に立証して、ロシアにおける歴史の力がプロレタリアートであることをしめした——マルクス主義のたゞしさをしめした。

註 わたしたちはここに日本のマルクス主義とちがつたレーニンのいわば發想法を感じる。それはそこからマルクス主義を移植するのではなくて、ロシアのうちからマルクス主義を確立しようとする態度である。

レーニンはロシアの革命的伝統との對決のなかで、ロシアの客観的現實の分析を通じて、マルクス主義を確立していった。こうすることによって、ナロードニキ主義の克服はロシアの革命的大衆の自己克服になることができたし、またマルクス主義はロシアのマルクス主義となることができた。

レーニンは、近くわが国に流行したように、革命的伝統のまえに押跪するのではなくて、それを徹底的に批判することによつてその現代的地位をあたえ、そうすることによつて革命的伝統をいかそうとした。ナロードニキ主義批判はレーニンの民主主義的勞農同盟論のなかでの農民の位置づけを決定する役割を果している。

三 『發展』の構造

わたしは『發展』に集大成されるレーニンのナロードニキ主義批判とロシアの資本主義發展の研究とがレーニン体系のなかにもつ位置を確定しようとした。それは、一つにはロシアのなかにマルクス主義を確立してプロレタリア覺醒の思想的地盤をつくるためであつて、のちの『なにをなすべきか』・『一步前進・二歩退却』に發展し、二つにはプロレタリアートの指導性と農民層の動播性とを確立して、のちの『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のための基礎条件の分析の役割をはたした。そうした意味で、それはレーニン体系の出発点となり基礎を構成するものであつた。わたしはつぎに『發展』の構造そのものを紹介しなければならぬ。

『發展』の外面的な構造はレーニン自身の『第一版の序文』のなかに要約されている――

「われわれの仕事の計画はつぎのとおりである。第一章ではできるだけ簡単に、資本主義のための国内市場の問題にかんする抽象的な経済学の、基礎的な理論的諸命題を考察する。これは、この著作のうちの実事ととりあつかう他の部分のためのいわば序論として役だち、その後の説明で理論を幾度も引証するを必要をなくすであらう。つぎの三つの章では、われわれは、農民改革後のロシアにおける農業の資本主義的進化を特徴づけることにつとめる。すなはち、第二章では、農民層の分解にかんするゼムストヴォ統計の資料をしらべる。第三章は、地主経済の過渡的な状態にかんする資料を、すなはち、地主経済の賦役制度が地主経済の資本主義制度にとつかわれつつあることにかんする資料をしらべる。そして第四章では、商業的農業と資本主義的農業とが形成されていく諸形態にかんする資料をしらべる。そのさきの三つの章は、わが國の工業における資本主義の發展の形態と段階とにあてられる。――第五章では、工業における、すなはち、農民的小工業（いわゆるクスターリ工業）における資本主

義のはじめの諸段階を考察する。第六章では、資本主義的マニファクチュアと資本主義的家内労働とにかんする資料を、第七章では機械制大工業の発展にかんする資料を考察する。最後の第八章では、この過程の、さきにもべた個々の側面のあいだの連関をしめして、この過程の全般的様相をえがきたすように、試みよう」(『発展』—国民文庫版第一冊一二三頁)。

わたしは『発展』のこの順序にしたがって、だが重点的に—市場理論(第一章)・農業の資本主義的進化(第二・三・四章)・工業の資本主義的進化(第五・六・七章)・総括(第八章)というように、簡単に紹介をしよう。

市場理論(第一章)

さきに述べたように、ナロードニキは資本主義のおくれた形態を「人民的生産」として機械制大工業(かれらの資本主義一般)と対立させ、資本主義による「人民的生産」の分解から機械制大工業のための国内市場縮少と資本主義発展の不可能とを結論した。レーニンはまずこうしたナロードニキの市場理論をくつがえした。もっともナロードニキの市場理論の誤謬とレーニンの市場理論はすてにはやく『いわゆる市場問題について』(一八九三年)と『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』(一八九七年)とのなかで体系的に述べられており、『発展』の第一章「ナロードニキ経済学者の理論的誤り」はそれらの一層の体系化であるといえる。

レーニンのいわゆる市場理論は三つの部分から構成されている——(一)資本主義の出発点であり一般的基盤である単純商品経済のもとの市場理論(第一章一・二)、(二)小生産者の分解—単純商品経済の資本主義商品経済への転化過程における市場理論(第一章三)、(三)資本主義商品経済における市場理論—実現理論(第四章四・五・六・七・八)からなっており、それは『資本論』第一部第一篇『商品と貨幣』↓同第二篇『貨幣の資本への転化』その歴史的説明としての同第二十四章『いわゆる本源的蓄積』↓第二部第三篇『社会的総資本の再生産と流通』に照応している。

(一) (單純) 商品經濟の基礎過程は社会的分業であつて、社会的分業は農業からいろいろの原料加工部門を分離し(したがつて農業人口を減少させて工業人口を増加させ)、さらに農工兩部門のなかに専門化の過程を進行させ、そうすることによつてそれぞれの部門の生産物を商品に転化するとともに相互に市場を提供させる。(くわしくは『いわゆる市場問題について』——『レーニン全集』第一卷九〇——一頁の表式1・2・3参照)。

(二) 小生産者の分解——直接生産者からの生産手段の収奪は生産手段を資本に転化し労働力を賃労働力に転化して資本主義的生産關係を創設する(いわゆる本源の蓄積過程)。この過程は、一方では生産手段と労働力とにたいする資本家市場をつくりだし、他方では資本家がつくりだす生産物—商品にたいする労働者市場(可變資本)をつくりだし、こうしてこの過程はそれがつくりだす商品に対する市場をつくりだす(前掲書表式4・5・6参照)。「人民的生産」の分解は国内市場を縮小するものではない。

(三) 資本主義商品經濟における市場理論—實現理論については、『資本論』第二部第三篇の再生産式について周知の通りである(前掲書七三—八五頁参照)。

そこで「国内市場の發展の程度は、その国における資本主義の發展の程度である」(『發展』前掲書六三頁)ということになるのであつて、国内市場の縮小から資本主義の不可能を論じ、この点から外国市場に救いをもとめるのはまちがつてゐる。

いまいった(一)單純商品經濟—(二)單純商品經濟の資本主義經濟への転化(以上二つがナロードニキのいう「人民的生産」である)↓資本主義的大生産という順序は、つぎの農業と工業との実証的分析の方法を全く規定している。

農業における資本主義的進化(第二・三・四章)

さきに引用した『第一版の序文』がしめすように、農業における資本主義的進化の実証的分析は、(一)農民層の分解、(二)賦役経済から資本主義経済への地主の移行、(三)国内市場の形成面からの総括——商業的農業の成長、からなっている。残念ながら、レーニンの豊富な資料の扱い方を省略して、結論だけを簡単に紹介せねばならない。

(一)農民層の分解——農民的ブルジョア化の道(第二章)。

ここで述べられている農民層の分解は第五章の農民工業——小営業の展開と一体をなすもので、レーニンも「第二章と本章(第五章——筆者)で、小農業および農民的農民的小営業における資本主義のもっとも原始的な諸段階を考察した」(『発展』——国民文庫版第二冊一八五頁)と述べた。またレーニンがここで分析している農民層の分解は『一九〇五——七年のロシア第一革命における社会民主党の農業綱領』(一九〇七年)におけるアメリカ型の道——農民的ブルジョア化の道の理論の土台になったものである。簡単に結論を要約しよう(第二章一三『第二章からの結論』参照)——

1 農民層の分解 ロシアの農民層 当時のロシアの農耕的・共同体的農民層の社会経済関係は、すでに商品経済であり資本主義商品経済に転化しつつあった——中農層は、商品経済の法則にしたがって、商業的農業・商工業企業を経営する五分の一の農村ブルジョアジーまたは富農層と一〇分の四の農村プロレタリアートまたは分与地をもつ賃金労働者階級とに分解して、両者の間に資本主義的關係が成立しつつある。「農民経済の総体のなかで……その意義という点では、農民ブルジョアジーは無条件に優勢である。彼らはこんにちの農村の主人公である」(『発展』——国民文庫版第一冊二〇六頁)。

農民層のこうした分解は資本主義のための国内市場をつくりだす——農村プロレタリアートに転落する層はいままでいままでの自給生産を放棄して消費資料を購入することとなり、富農層は生産手段を資本に転化し市場からより多くの消費資料を購入する。龐大な資料をつかって、レーニンはナロードニキの「人民的生産」のこうした

現実的内容を裏証した。

2 クラーク——商業高利貸資本　ところで、「富農層が純収入というかたちでうけとる現金は、わが国の農村で非常に発展している商業や高利貸業にむけられるか、あるいは、有利な条件があるときには、土地の買入れや経営の改良などに投下される。ひとことごいえば、これは小地主である」(前掲書二〇六頁)。「クラーク」と「経営上手な百姓」とのいまいった結合を、ナロードニキは「おたがいになんの結びつきもない対立した型の現象」と強調したが、レーニンは笑殺してそれを「同一の経済現象の二つの形態」——資本主義のひくい発展段階の必然的現象とみたのである(前掲書二二四—二二八頁参照)。

註　商業高利貸資本(わが国でいわゆる前期的資本)の問題については、ここ(第三章一三)・第五章六・第六章六の三ヶ所で詳述されているが、ともに、わが国で通説となつている産業資本対前期的資本の絶対的対立論でなく、資本主義のある段階の「同一の経済現象の二つの形態」理論である。読者自身よく検討することを希望する。

(二) 賦役経済から資本主義経済への地主の移行——地主的ブルジョア化の道(第三章)

ここで述べられている地主経済の変質は、すぐ引用するように、第六章の『資本主義的マニユファクチュアと資本主義的家内労働』に比定されている。さらにレーニンがここで分析している地主経済の変質は、のちの有名な「一九〇五—七年のロシア第一革命における社会民主党的農業綱領」におけるプロシヤ型の道——地主的ブルジョア化の道の理論の土台になった。いつもの通り簡単に紹介しよう……

1 賦役経済制度と資本主義的経済制度との結合　一八六一年の農奴解放は地主経済を賦役経済制度から賦役経済制度と資本主義的経済制度との混合形態にかえ、賦役経済制度を清掃しなかつた。それについてレーニンは述べてい

「資本主義的組織へいちどに移行することができなかった一つの原因は、むかしからの賦役経済制度がたどつがえされたというだけで、最終的にはろほされてはいなかったことであつた。農民経済は地主経済から完全には分離されてはいなかった。というのは、地主の手には農民の分与地のうちのきわめて本質的な部分が、すなわち、切取地、森林、採草地、家畜の水飲場、放牧地などがこされたからである。農民は、これらの土地（または利益権）がなければ、自立した経営をまつたく営むことはできなかつたし、また地主はこうして雇役の形態でむかしからの経済制度をつづけることができたのである。経済外的強制の可能性もやはり、のこつていた」（前掲書二二四―五頁）。

それでは一体結合形態または混合形態とは、どんなものであつたか。

「雇役制度と資本主義制度との結合によって、現在の地主経済の構造は、経済組織の点で、機械制大工業が現れるまえにわが国の繊維工業で優勢であつた構造と、きわめて似たものになっている。ここでは、商人が作業の一部分を自分の道具と賃金労働者とをつかつて行つていたが……他の部分は、彼の材料で、彼のために仕事をするクスターリ農民の道具によって、行われていた。だがここでは、作業の一部は、地主の道具をつかつて賃金労働者によって行われ（資本主義経済―筆者）、他の部分は、他人の土地で働く農民の労働と農具とによつて行われている（雇役経済―筆者）……そこでも、古い制度は、生産形態……の停滞とアジア的後進性の支配とを意味するにすぎない。そこでもここでも、新しい資本主義的経済形態は、……一大進歩なのである」（前掲書一三九―一四〇頁）。

2 雇役制度の衰退 地主経済の片方の要素たる雇役制度は地主のために農民の農具で働く農民―中農層を前提している。さきに述べた農民層の分解はまさしく中農層の解体であるから、この農民層の分解が地主経済における雇役

制度を資本主義経済制度に移行させる（第二章四参照）。こうして雇役制度の資本主義経済制度へのいわば自然的移行を説明するという形で、レーニンは賦役経済の阻止的性格を捨象した。

（三）国内市場の形成面からの総括——商業的農業の成長（第四章）

1 商業的農業の成長 いままで述べてきた二つの現象——農民層の分解と地主経済の変質は、それ自身商業的農業の成長を地盤としており、富農層と地主とが商業的・企業家的性格をもち農村プロレタリアートが労働力販売者となることである——「それは農業生産を社会化しつつある」（『発展』——國民文庫版第二冊九二—一〇二頁参照）。

2 資本主義的解放 「ロシアでは農業資本主義がはじめて、雇役と農耕者の人格的従属とを根こそぎくつがえした」（前掲書一〇二頁）。さらに、ナロードニキが「共同体原理は、資本が農業生産をとらえるのを妨げている」と主張し「共同体か、それとも資本主義か？」という問題をだしたのに対し、レーニンは「あらゆる計画がつけられたり、ひっくりかえされたりしているあいだに、資本主義は自分の道をすすみ、そして共同体的な農村は小土地所有者の農村に転化したのであるが、お人よしのナロードニキはそのことにはついに気がつかなかったのである」（前掲書一一—二頁）と笑殺している。

工業における資本主義的進化（第五・六・七章）

工業におけナロードニキの「人民的生産」はいわゆる「クスターリ工業」であって、ナロードニキはこの「クスターリ工業」をかれらのいう資本主義一般——機械制大工業と対置した。レーニンは、この「クスターリ工業」に関する龐大な資料を整理して、それが資本主義工業のひくい発展段階——小営業段階と資本主義マニュファクチュア段階との工業であることを実証し、したがって「クスターリ工業」が機械制大工業の地盤であり、機械制大工業に

發展しつつあることをあきらかにした。

(一)小営業(第五章)

小営業というのは工業における單純商品經濟（ウツスザルグ）——小商品生産のことであつて、自給生産たる家内工業（ウツスザルグ）や注文生産・顧客生産たる手工業（トリヤニク）とはハッキリ区別された概念である。そしてこの小営業は事実上「農民的（ウツスザルグ）小営業」——農業と工業とが結合した段階の工業形態であり、したがつてさきの「農民層の分解」で述べたことがそのままあてはまる——富農層は同時にブルジョアの商工業経営者であり、農村プロレタリアートは同時に商工業賃労働者である。こうした小営業者のなかに、レーニンは資本主義的單純協業をいれている（第五章五参照）。

ところで、さきの「農民層の分解」で述べたとおなじく、小営業は商業資本（ここでは買占人）と密接にむすびついているが、レーニンはそれを、まず第一に小営業の分解から、「自分たちのなかから、より豊かな営業者ばかりでなく、とくに、商業資本の代表者をも不可避免的に生みだす」（前掲書一六三頁）と説明し——「同一の經濟現象の二つの形態」であると説明し、第二にその商業資本が買占人として小営業を隷屬させて賃金労働者——資本主義的家内労働者に転落させてゆく過程から説明している。レーニンはここでも商業資本の跳梁を産業資本の未發展の結果と考へているが、産業資本の未發展の原因とは考へていない（第五章六参照）。

(二)資本主義的マニユファクチュアと資本主義的家内労働(第六章)

マニユファクチュアにおける新しい分業の導入——この分業を契機とするマニユファクチュアと家内労働との結合（産業資本と商業資本とのより高度の結合）——工業の農業からの分離の發展（非農業的中心地の形成）——地域的分業の發展などなど、これらについてはよく知られている通りである。

註 暮末維新时期をマニユファクチュア段階とみるか小管業段階とみるかは、故服部之総氏とわたしとの間に争われた問題であるが、これは事実問題であつて方法問題でなかつた。方法問題としては二人ともまちがつていた——二人ともマニユファクチュア段階または小管業段階を農民のブルジョアの分解から全くきりはなして提起した。わたしの方法からする研究史の検討については、拙稿『民富の問題』（商業論集第二四卷第三号）参照。

(三)機械制大工業の發展（第七章）と全体の總括（第八章）

いままでの分析がしめした通り、一九世紀末のロシアの社会経済的關係は、商品経済の基盤にたつており、商品経済の法則にしたがつて農業でも工業でも資本主義が發展しているということであり、そうだとすれば機械制大工業はこうしたロシア資本主義の發展の單なる頂点であつて、ナロードニキのいうような「人為的」制度ではない。したがつてまた「ロシアにおける工場制工業の急速な發展は、生産手段：に対する巨大な、そしてますます増大する市場をつくりだし、個人的消費ではなく、生産的消費のための物資の製造に従事する人口部分を、とくに急速に増加させる。しかし、また個人的消費のための物資にたいする市場も、ますます多くの人口部分を農業から商工業的転業に転じさせる機械制大工業の成長の結果、急速に拡張する」（第七章最後の文章）。機械制大工業の国内市場は形成されるのであつて、外国市場の問題はここからでなく、ほかから提起されてくる。

資本主義の「使命」は社会的労働の生産性の向上と労働の社会化である（最後の章の最後の節——第八章参照）。

四 封建制と資本主義

——または封建制の捨象——

わたしはいま『發展』の構造を簡単にスケッチしてきたが、読者は不思議がつておそらくきくであらう。封建制

の問題はどうなったのか、資本主義は封建制のなかでそれをほりくずしつつすすんできたのではないかと。そして読者は封建制の問題を資本主義発展の研究の出発点とすべきであると要求するであろう。日本資本主義発展の研究史はこの設問から出発したのである。

レーニンはロシアにおける封建遺制の問題をきわめて重視して、『人民の友とはなにか』以来たびたび言及した。そして『人民の友とはなにか』・『社会民主党綱領草案と解説』（二八九五年）・『ロシア社会民主主義者の任務』（二八九七年）などの『発展』以前の綱領関係文書で、レーニンはロシアの封建遺制の撤廃——ブルジョア革命が当面の任務であると規定した。それにもかかわらず、レーニンはいまいった封建制から出発することに反対した。すでに『ナロードニキ主義の経済学的内容』（二八九四年）で、商品生産の前提となるのは「比較的に向質の現物生産者、農民である」という文章に、「地主のために働く農民である。現物経済から商品経済への移行をよりはっきりとしめすために、その面はうしろにやられている」と註記している（『レーニン全集』第一巻五二〇・二二頁参照）。さらに『発展』にはこうある。前節の「農業における資本主義的進化」の（一）「農民層の分解」のところで引用した文章をレーニンは吟味しながら次のようにいった。

「農村ブルジョアジーは現在の農村の主人公である、とわれわれはさきに行ったが、そのばあい分解をおしとどめているつぎの諸要因を、すなわち、債務奴隸制、高利貸や近隣の地主のこともしばしばある。しかし、このような捨象はまったく当然の方法である。そうしなければ農民層のあいだでの経済関係の内部的構造を研究することはできないからである」（国民文庫版第一冊二一八九頁、傍点筆者）。

このようにして、レーニンは資本主義の発展を研究する場合には、封建制の問題を捨象するのが「まったく当然

の方法である」と考えて、封建制をある意味で捨象したのである。

それは『発展』がレーニン体系のなかにもつ位置からしても当然である。最初に説明したように、一八九三年から一八九九年、さらに一九〇四年にいたるレーニンの課題は、ロシアにおけるプロレタリアートの革命的指導性をロシアの経済的現実（資本主義）から立証し、かれらを小生産的農民およびそのイデオロギーから独立したプロレタリア党に結成させることであつたが、そうしたプロレタリアートをうみだし、かれらをプロレタリア党に結成させる客観的条件はロシアにおける資本主義の発展だけである。こうして封建制の捨象はレーニンの課題にもピッタリと合致するのである。

したがって、『発展』は、ロシアにおける資本主義の発展を分析して、それを阻止する封建遺制を捨象している——資本主義と封建制との対抗を捨象しているから、それは当時のロシアの民主主義的目標——ブルジョア革命の経済的内容を積極的に説明するものではない。『発展』は封建制の問題を方法的に捨象することによって、ブルジョア革命の問題を捨象したといえるであらう。

『発展』は、いまいった二つの点で——封建制とブルジョア革命を捨象し、資本主義の発展からプロレタリアートの独自の役割を論証したという点で、『資本論』のいわば直線的発展であるといえる。『資本論』は資本主義一般の歴史法則を証明し世界プロレタリアートの歴史的役割を規定し、『発展』は特殊ロシアにおける資本主義の発展——資本主義の歴史法則を分析し、ロシアのプロレタリアートの独自の歴史的役割を証明したのである。

だからまた、『発展』は、たとえばレーニンの包括的著作『人民の友とはなにか』にくらべて一つの抽象であつた。『人民の友とはなにか』のなかで、レーニンはプロレタリアートの二重の任務——民主主義的任務と社会主義

的任務とを提起しているが、『発展』はいつてみれば両者の共通地盤であるプロレタリアートの階級的結集の客観性の経済学的分析であった。「人民の友とはなにか」にあつて『発展』で捨象された封建制の問題は、ふたたび「一九〇五―七年のロシアの第一革命における社会民主党の農業綱領」で経済学的分析にゆだねられる。レーニンは『農業綱領』でブルジョア革命の経済理論を完成したのである。

註 いまいつたように、レーニンは、(一)『発展』で、封建制・高利貸資本・共同体規制などを捨象して資本主義の発展を分析して、プロレタリアートの指導性を論証し、(二)『農業綱領』でさきに捨象した要因をふたたび導入してきて、ブルジョア革命の必然性とその革命主体とを論証した。こうしたレーニンの方法とわが国の資本主義発展の研究方法を比較してみるがよい。全く正反對である。

山辺健太郎氏は、『レーニン全集』第三巻折込『研究のしおり』のなかの『日本プロレタリア運動と発展』のなかで、『日本資本主義発達史講座』にすでに『発展』の理論が適用されていると語っているが、山辺氏はこの場合全くまちがっている。わたしの知るかぎり、『発展』の方法はわが国で理解されたことがなく、したがつて『発展』の理論がたゞしく適用されたことは一度もない。わたし自身もその例外ではない。

講座派理論は、日本資本主義発展の研究に、(一)レーニンが捨象した封建制の問題を分析の出発点におき、(二)再生産理論―実現理論を分析理論として、機械制大工業を単純商品経済とその転化形態とに对立させて、後者を封建一色にぬりつぶした。これも『発展』の理論が適用されたといえるであらうか？